

シェーラーの世界概念

— 人格と世界, 身体と環境世界, ミクロコスモスとマクロコスモス —

畠 中 和 生

(2008年10月2日受理)

Max Schelers Weltbegriff:
Person – Welt, Leib – Umwelt, und Mikrokosmos – Makrokosmos

Kazuo Hatakenaka

Zusammenfassung: Es ist der Zweck dieser Abhandlung, Max Schelers Weltbegriff in seinem Hauptwerk *Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik* (1913/1916) zu betrachten, und dadurch seinen Zusammenhang mit philosophischer Anthropologie klarzumachen. Schelers Weltbegriff enthält drei Bezugeinheiten: Person – Welt, Leib – Umwelt, und Mikrokosmos – Makrokosmos. 1. 《Person》 ist die konkrete Einheit, die in jedem Akt ganz lebt und dazu gehört. Das Sachkorrelat der Person ist die 《Welt》. Jede Welt ist gleichzeitig eine konkrete Welt nur als die Welt einer Person. 2. Die 《Leibeinheit》 ist uns als ein unmittelbar anschaulicher, material identischer Gehalt und als Ganzes gegeben. Ihr steht eine 《Umwelt》 als wesentliches Gegenglied gegenüber. Die Umwelt stellt nur die für eine Leibeinheit bedeutsame und in ihr als wirksam erlebte Auswahl von Inhalten aus dem Weltgehalt dar. 3. Alle 《Mikrokosmos》, d.h. alle individuellen Personalwelten sind zugleich Teile des 《Makrokosmos》. Sein personales Gegenglied ist Gott.

Stichwörter: Person, Welt, Leib, Umwelt, Mikrokosmos

キーワード: 人格, 世界, 身体, 環境世界, ミクロコスモス

はじめに

シェーラーの哲学的人間学の発想, とくにその世界概念の後代への影響についてはすでに指摘されている¹⁾。とくに彼の人間学における中心概念の1つである「世界開在性」は、ハイデガーの『存在と時間』(1927年)の形成に影響を与えたといわれる。

この「世界開在的」や「世界開在性」という言葉は、シェーラーの『宇宙における人間の地位』(以下、『人間の地位』と略記する)にはじめて登場する言葉である。たとえば、彼は人間についてこう主張する。「精神的存在者」である人間は、環境世界に拘束されるものではなく、「環境世界から自由 (umweltfrei)」であ

り、「世界開在的 (weltoffen)」存在である。すなわち人間とは、「無制限に《世界開在的に》行動しうる X である。人間生成とは、精神の力によって世界開在性へと高まることである」(GW9-a, 33/51)。

ところでこの『人間の地位』は、1927年4月の「人間の特殊地位」と題する講演に基づくものであって、同年『ロイヒター』第8巻に掲載されたこの講演は翌年改題されて単行本として出版された。ということは、ハイデガーが『存在と時間』を執筆する際に同講演あるいは同書を直接参考にしたとは考えにくい。というのも、シェーラーのこの講演の日時が『存在と時間』の出版月より2ヶ月あつたのであるし、『人間の地位』は『存在と時間』よりも1年あつて出版されているからである。

とはいえ、影響が推測できないわけではない。シェーラー自身が述べているように、彼はケルン大学において1922年から1928年にかけて「生物学の基礎」、「哲学的人間学」、「認識論」、「形而上学」に関する講義を行っており、著作という形ではないにせよ、『存在と時間』が出版される以前にすでに人間学に関する所説を発表していたのであって、このことからすれば、『人間の地位』はそれらのいわばダイジェスト版といえるものである。1924年12月のハイデガーのケルン講演以降2人の交流が深まったと推測できるが、このケルン訪問時の会話での直接の影響は明らかだといえるし、さらにこれ以降何らかの形でシェーラーの所説がハイデガーに伝わって、「世界内存在」という概念の形成に影響を及ぼしたのかもしれない。

また『存在と時間』には、シェーラーの人間学に関する講演「知識の諸形態と教養」(1925年)と論文集『知識形態と社会』(1926年)とが注で挙げられているので、これらの著作からシェーラーの所説の内容をハイデガーが知っていたのもたしかである。

ところでこうした影響については、シェーラーの人間学以前の著作からの影響もあるようにも思われる。

ハイデガーは、シェーラーとの直接の交流以前にシェーラーの著作を読んでいた。とくに1916年出版の『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』(以下、『形式主義』と略記する)は、フッサールを責任編集者とする『哲学ならびに現象学的研究のための年報』(以下、『年報』)第1巻と第2巻に掲載されたものであるが、ハイデガーは、シェーラーのこの『形式主義』を、同じく『年報』第1巻に収められたフッサールの『纯粹現象学と現象学的哲学のための考案』第1巻とともに、『年報』への最も重要な寄与であり、広範囲な影響を有するものとみなしている²⁾。

『形式主義』におけるシェーラーの人格概念は、批判の対象として『存在と時間』でも取り上げられている。また『形式主義』には、ハイデガーに影響を与えたといわれるユクスキュルについての言明が注ではあるが見られ、この時点でシェーラーがユクスキュルの生物学説について知っていたことが確認できる。

さらに『形式主義』では、人格と世界との相関関係や、身体と環境世界との相関関係も詳しく述べられている。そうだとすると、幾人かの研究者も指摘するように、ハイデガーが人間存在の「世界性」および「世界内存在」という概念を形成する際に、人間学における所説だけでなく、『形式主義』におけるこれらの記述を参照した可能性も考えられる。

小論では、『形式主義』におけるシェーラーの世界概念とこれに関連する諸概念の内容について、哲学的

人間学における諸見解と関連づけながら整理と確認を行ないたい。これによって、ハイデガーへの影響のみならず³⁾、後期の哲学的人間学との思想的連続性も明らかになるはずである。

1. 5つの相関的關係

小論の主たる目的は、『形式主義』で論じられた人格と世界、そして身体と環境世界という2つの相関的關係を明らかにすることにあるが、シェーラーはこれらを含めて5つの相関的關係を整理している(GW2, 157-158 Anm. 1/259-260)。概略とはいえシェーラーの考える最も広い意味での「世界」論として簡潔に理解できるので、まずは、これら5つの相関關係について確認しておこう。

一般に、個体(Individuum)——これは、たとえば人間とか○○人などと言ひ換えられる——と環境世界(Umwelt)という相関的な区分が存在しているが、シェーラーはこの一般的な区分をつぎのように分析している。

第1に、この区分は、自我(Ich)と外界(Außenwelt)という区分とは異なる区分である。前者は心的領域を、後者は物的領域を表す表現であるが、個体にも、環境世界にも、心的構成部分と物的構成部分とが属している。したがって、この自我と外界という区分は、それらが個体と環境世界の一部分を形成するとしても、両区分が等値されてはならない。

第2に、身体的物体(Leibkörper)⁴⁾と、これを取り巻く諸物体——これは死せる諸物体(tote Körpern)と呼ばれる——という区分も、個体と環境世界という区分とは異なる区分である。前者の区分は、外的知覚の諸対象の領域の内部で成立する区分であって、この領域の諸現象は、それらが身体的物体に対して依存関係にあるか、死せる諸物体に対して依存関係にあるかに応じて、生理学的現象と物理学的現象とに分割される。

第3に、心としての、直接的に体験された自我(seelisches, unmittelbar erlebtes Ich)と、たとえば「私は空腹だ」というような一切の有機感覚や衝動的努力の所在場所としての、身体的心(Leibseele)あるいは身体的自我(Leibich)⁵⁾の領域という区分も、個体と環境世界という区分とは異なる区分である。前者の区分は、内的知覚の諸対象の領域の内部で成立する区分であって、この領域の諸現象は、それらが自我に対して依存関係にあるか、身体的自我に対して依存関係にあるかに応じて、純粹心理学の現象と生理学的心理学の現象とに分割される。

第4に、個体と環境世界という一般的な相関的な区分は、身体という統一体 (Leiblichkeit) ——部分的身体ではなく統一体としての身体——と環境世界 (Umwelt) という相関的な区分の意味を含んでいる。この区分について、シェーラーはつぎのように述べる。

「身体という統一体は、外的および内的な知覚からなおまったく独立的に (同一の《身体》に関する外的知覚の現象と内的知覚の現象との恒常的並列によって初めてというのではなく)、直接的に直観的な、実質的に同一の内容として、また全体として、私たちに与えられている。そしてこの身体という統一体こそが、《環境世界》に対する本質的な相関項たるものである」(GW2, 158 Anm. 1/260)。

第5に、こうした心的物的には無差別 (psychophysisch indifferent) な——しかも直接的に与えられる——身体という統一体に対して、同じく心的物的には無差別な、諸作用の統一体としての人格 (Person) が対置される。そしてこの人格に対して対象面における本質的な相関項として対応するものは、環境世界ではなく、世界 (Welt) と呼ばれるものである。

以上の5つの相関的関係は明確に区別されるべきものである。シェーラー自身による簡条書きを使って今一度確認すれば、この5つの相関的関係は、つぎの5つにまとめられる⁶⁾。

1. 人格—世界
2. 身体—環境世界
3. 自我—外界
4. 身体的物体—死せる物体
5. 心—身体的心

そして、繰り返していえば、個体と環境世界という一般的な相関的な区分が持ち出される場合、まずはこれらの5つの相関的関係が混同されることなく明確に区別されていなければならない。

うえで述べたように、この5つの相関的関係をすべて内包するものが、シェーラーの考える最も広い意味での「世界」論とみなすことができる。こうした簡潔なまとめとは別に、『形式主義』では、5つの相関的関係のうちでとくに「人格と世界」と「身体と環境世界」の2つの相関的関係が別の箇所であらためて論じられている。以下では、そこでの記述を中心にして、シェーラーの哲学的人間学と密接に関連するこの2つの相関的関係について順次見てみよう。

2. 人格と世界

人格とは

うえで述べたように、人格に対して対象面における本質的な相関項として対応するものは、環境世界ではなく、「世界」と呼ばれるものである。人格と世界について見てみるまえに、世界の相関項とされる人格の概念について簡単に確認しておこう。

シェーラーが『形式主義』で人格の本質定義として挙げているは、つぎのような規定である。

「人格とは、多様な本質を有する諸作用 (Akte) の具体的でそれ自身本質的な存在統一体であり、この統一体は自体的に (...) すべての本質的な作用相違 (...) に先行する。人格の存在がすべての本質的に相違する諸作用を《基づける》」(GW2, 382-383/33)。

『形式主義』での人格概念分析についてはすでに多くの文献で論じられているので⁷⁾、ここではシェーラー自身によるつぎのような簡潔なまとめを提示しておこう (Vgl. GW10-a, 63-64/369-370)。

1. 人格という統一体は、その諸作用の《背後に》ある物あるいは実体という統一体でもないし、また何らかの仕方単なる集合体という統一体でもなくして、その諸作用の各々のうちに全体として生き、存在し、そして本質法則的に無限系列の諸作用がそれに属している独自の《具体的な統一体》である。
2. あらゆる独自の精神的諸作用の法則、すなわち作用の単なる意味連関の法則も、それに従って作用の真偽が規定される法則も、身体的一心理的な (leiblich-psychisch) 存在と出来事の領域から独立しており、したがって自律的な内的本質合則性を有している。
3. 他者の人格の存在とそれの体験の《了解》は、その身体的存在と身体的性質から《推論され》たり、あるいは《感情移入》によって知られるに至るのではなく、物体界それ自身の存在と同じように、直接的に与えられる。

ここで最低限確認しておくべき点は、シェーラーにあっては人格とは、心的領域にも物的領域にも属するものではなく、諸作用を基づける統一的存在であるとともに、諸作用の遂行を通じて両領域に属するものを対象化できる存在だということである。

人格と世界

人格をこのように理解したうえで、続けて人格と世界との関係について見てみよう。

シェーラーは、作用とその対象を相対応する関係において捉えている。すなわち彼は、作用には志向的な対象が対応するとともに、作用の統一体には対象の統一体が対応すると考える。これら2つの統一体のうち、前者が「人格」と呼ばれ、後者が「世界」と呼ばれるものにはかならない (GW2, 381/30)。この場合重要なことは、シェーラーが世界について語る場合、現実（物理的に）存在する世界という意味においてはなく、作用の志向的对象の総体としての世界という意味で語っているということである⁸⁾。

さらに世界の具体性ということに関していえば、「おのおの世界はただただ人格の世界としてのみ具体的な世界 (konkrete Welt) である」(GW2, 392/47) とされる。シェーラーにおいて作用対象の総体としての世界は、それらが人格作用の対象となるかぎりにおいて、内的世界や外的世界や身体性の諸対象（これとともにすべての可能的な生命領域）、理念的对象の領域、価値の領域といったすべての対象領域を含むものと考えられているが、これらの対象領域は「世界の部分として、人格の世界の部分としてはじめて十分に具体的なものとなる」(GW2, 392/47-48) のである。けれども、「ただ人格のみはけっして《部分》ではなくつねに、《世界》の、すなわち人格がそのうちでみずからを体験する世界の相関態である」(GW2, 392/48) とされる。

ところでシェーラーにとって「おのおの有限人格は個体 (Individuum) であり、しかも人格そのものとしてそうなのである」(GW2, 371/15)。したがって、人格と世界との相関関係を考慮すれば、こうしたおのおのの個性的人格には、個性的な世界 (individuelle Welt) が対応していることになる。すなわち、人格に対する世界は、その実質においてそれぞれに具体的に異なっており、ある人格にはある世界があり、他の人格にはまた他の世界があるのである。

こうしたそれぞれの人格に対応する具体的な個性的な世界は、シェーラーによって「ミクロコスモス (少宇宙)」と命名されているが、これについては章を改めて述べることにしたい。

人格としての精神

ところで哲学的人間学においては、人格という用語よりも「精神 (Geist)」という用語が比較的好んで用いられている。そこでは、たとえば人間が「生命的存在者 (Lebewesen)」であると同時に「精神的存在者 (Geistwesen)」であると規定されている。『形式主義』

では、「人格こそは、具体的精神が問題となるかぎり、精神の本質必然的な唯一の存在形態である」(GW2, 389/42) とされているが、『人間の地位』では、「生命」の外部に存する新しい原理として提示された「精神」が、シェーラーによってつぎのように規定されている。

「それはたしかに、《理性》という概念をも含んでいるが、《観念的思惟》とならんで、一定種類の《直観》、すなわち根源現象や本質内容の直観をも含み、さらには好意、愛、悔恨、畏敬、感嘆、浄福と絶望、自由な決断などの、一定部門の意志的・情緒的な諸作用をもまた含む。この精神が有限の存在領域の内部で現れる場合、その作用中心をわれわれは《人格》と名づけ、あらゆる機能的な生命中心、内的に見れば《心的》中心と呼ばれるものから、きびしく区別するのである」(GW9-a, 32/47-48)。

精神についてのこの規定からも、また作用に「精神的」という形容が付されていることからわかるように、シェーラーにあっては、人格と精神という2つの概念はほぼ等価的なものであり⁹⁾、したがって『形式主義』における「人格と世界」という対応関係は、哲学的人間学における「精神と世界」という対応関係に引き継がれていると理解することが可能であろう。

3. 身体と環境世界

身体とは

上述のように、シェーラーによれば、身体という統一体には環境世界が対応している。ここではまず、彼の身体概念から見てみよう¹⁰⁾。

シェーラーは身体を、人格と作用とは異なり対象あるいは所与の領域に属するものと考えのではあるが、この領域の内部において心的領域にも物的領域にも属さない——「属さない」とは、存在的にそれらと無関係という意味ではなく、それらに還元できないという意味である——、「身体意識 (Leibbeußtsein)」の対象として与えられる独自の所与である、と主張する。彼は身体の対象性および独自性について、つぎのように述べる。

「身体は、人格領域と作用領域にはなくして、そのつどの《或るものについての意識》とこの意識の様式ならびに様相との対象領域に所属している。しかも身体の現象的な所与性様式および基づけは、自我とこの自我の諸状態や諸体験との様式ならびに様相とは本質的に相違したものである」(GW2, 397/54)。

「身体の所与性は、外的な（物体の）知覚や内的な（自我の）知覚の諸事実の並列のうちにはまったく存立せず、1つのまったく固有の本質所与性を提示する（すなわち身体は、物体あるいは自我に基づけられることのない身体現象として与えられる）」（GW10-a, 387/304）。

ここで身体は対象領域に属すると述べられているが、このことは、身体が、人格という志向的な作用中心の对象的相関項としての「世界」のうちの1つの構成要素であることを意味する。すなわち身体とは「世界内容の1つの最小限の構成要素」（GW10-b, 434）なのである。

身体概念についてももう少し詳しく見てみよう。

われわれは自分の身体を、外的感官（視覚、聴覚、嗅覚、触覚など）を用いて知覚する。しかしこうした知覚内容を有する外的身体意識が仮に失われたとしても、われわれの身体意識のすべてが失われるわけではない。なぜならわれわれは外的身体意識とともに、内的身体意識をもっているからである。内的身体意識とは、内的感覚あるいは有機感覚（筋肉感覚、関節感覚、苦痛感覚、空腹感覚など）において自分の身体存在についても意識のことである。

しかし外的身体意識と内的身体意識の内容がただちに身体（Leib）というわけではない。前者の内容は、外的身体知覚において与えられる身体内容であり、「身体的物体（Leibkörper）」と呼ばれる。これに対して後者の内容は、内的身体知覚において与えられる身体内容であり、「身体的心（Leibseele）」あるいは「身体的自我（Leibich）」と呼ばれる。うえでも見たように、この身体的心とは、たとえば「私は空腹だ」というような一切の有機感覚や衝動的努力の所在場所のことである。

シェーラーは、内的身体意識と外的身体意識とに与えられるこうした身体的心と身体的物体から、身体そのものをつぎのように明確に区別している。

「この身体そのものはわれわれにとってむしろ独立的であり、すべての何らかの仕方で分離されたいわゆる《有機感覚》に先立って、また身体すべての特別な外部知覚に先立って、完全に統一的な現象的な事実として、このようであり他のものである《状態》の主語として与えられている。身体は基づける、あるいは身体の直接的な総体知覚は身体的心という所与性ならびに身体的物体という所与性を基づける。そして、まさにこの基づける根本現象が最も厳密なる語意における《身体》である」（GW2, 399/58）。

では、この根本現象としての身体をわれわれどのようにして獲得するのであろうか。

しかし、これは無意味な問いかもしれない。というのも、シェーラーによれば、「内的〔身体〕意識と外的〔身体〕意識に——すなわち、前者には《身体的心》として、後者には《身体的物体》として——与えられている《身体》の同一性、われわれはこれを学ぶ必要はない！」（ibid.〔 〕内は筆者による）からである。うえて引用した文章を再度引用すれば、身体あるいは身体という統一性はすでに、「外的および内的な知覚からなおまったく独立的に、…直接的に直観的な、実質的に同一の内容として、また全体として、私たちに与えられている」（GW2, 158 Anm. 1/260）のであり、換言すれば「（純粋な現象学的直観に対して）特殊の実質的な本質所与性を明示し、この所与性はあらゆる事実的な身体知覚のうち知覚の形式として働いている」（GW2, 397/54）のである。

シェーラーの身体概念について今一度まとめていえば、身体とは、心的なものにも物的なものにも還元されえない、心的物的に無差別な存在であり、心的なものと同様に、他の現象に還元されえない独自の存在であるといえよう¹¹⁾。すでに述べたように、こうした身体についての意識が「身体意識」と呼ばれるものであるが、この身体意識は「われわれにつねに、明瞭さに多少の差はあれ分節化された1つの全体の意識として与えられている。この身体意識は、《有機感覚》のすべての特殊な複合体の所与性から独立して、かつそれに先行して与えられている」（GW2, 401/61）のである。

人格による身体支配

さて、われわれの身体意識の対象としての身体が、人格という志向的な作用中心の对象的相関項としての世界内容のうちの1つの構成要素であることはすでに述べたことであるが、ここで人格と身体との関係についてももう少しふれておこう。

シェーラーによれば、みずからの身体意識において自己がこの身体意識の内容と同一化されている、あるいはそれに埋没してしまっているような仕方で生きている人は、まだ人格とはいえない存在である¹²⁾。人格という名称は、自己の身体への支配（Herrschaft）が現われ、自己自身を直接自己の身体への支配者として感得し体験する人においてのみあてはまる。

「人格性という現象は、ただだんに本質的に健全で成熟した人間だけに限定されるのではなく、自己の身体への支配が直接的に内部に現象し自己自身を直接

的に自己の身体の主^人として感得し知り体験している人間にも所属する」(GW2,473/172)。

身体は、人格の表現領域であるのみならず、実現へと促すすべての人格的志向の第一の操縦可能な媒体でもある。それゆえ彼によれば、人格が与えられるのは、「為しうる (Tunkönnen) が、身体を《通じて》存し、しかもそれが…すべての実際の行為に先行する場合だけ」(GW2, 473/172)である。人格は、自己の身体の「主人」としての自覚を持っている。支配の本質は、原理的には現実の身体状態から独立に、「意欲」と「為しうる」こととのあいだの直接的な連続性のうちに存している。このような自己身体の支配者が人格とみなされるのである。

身体と環境世界

シェーラーの環境世界概念には、ユクスキュルの生物学説の影響がある。その学説とは、一言でいえば、人間も動物もそれぞれの種に固有な環境世界をもっている、と要約できる¹³⁾。

シェーラーがいつユクスキュルの生物学説を知ったのかについては確定できないが、『形式主義』第1部発表時の1913年にはそれをすでに知っていたことは確実である。というも、彼は『形式主義』第1部においてみずからの環境世界論を展開するにあたって、注ではあるが、「たとえば虫や魚の《環境世界》は人間の環境世界のうちには少しも《含まれて》いない。もろもろの異なった動物種の環境世界はつねにある特殊な手続によってはじめて確定されるべきものである(この点については、ヤーコブ・フォン・ユクスキュル『動物の環境世界と内界』を参照)」(GW2, 169 Anm. 2/278)と述べているからである。しかも翌年にはユクスキュルの著作の書評も発表している (Vgl. GW14, 394-396)。

シェーラーは環境世界 (Umwelt) を (Milieu) とも呼んでいるが、この環境世界を、ユクスキュルと同様に、ある生物の身の回りにあるものという意味の (Umgebung) とは異なるものとする。というも、ある生物の環境世界は、その生物にただ対置されているだけの固定的な世界構造ではなくて、「ある生物自身に効果を及ぼす (wirksam) ものとして体験された世界の総体あるいは統一的全体」(GW2, 168/176) であるからである。たとえば、雄ノロシカにとっての森は人間にとってのそれとは別の環境であり、その森に生息するトカゲにとってはまたそれらとは別の環境となる。すなわちそれぞれの生物は、自身のそれぞれ別種の有機体機構にもとづいて、同一の森から

(Umgebung) として与えられる諸刺激を各自の種に応じてそれぞれ異なったものとして体験しているのである。

身体を有する各々の有機体は、環境世界において出会う対象や刺激が多様に変化するにもかかわらず、恒常的であり続けるある特定の環境世界構造をもっている。環境世界は、関心や注意や知覚を向けることによって初めて成立するものではなく、むしろそれらが可能となるにはそれらの内容がすでに環境世界に属していなければならない。しかし環境世界と身体的有機体との適応関係は一方的なものではない。「身体的物体の構造法則——すなわち、持続的・発生的意味での形態学的形式法則——と環境世界構造はつねに、《適応 (Einpassung)》と呼ばれうる相互可逆的な法則的關係にある」(GW8, 295/164) のである。

では、身体を有する有機体としての人間にとっての環境世界とはどのようなものであろうか。

われわれが「環境」と呼ぶものは、シェーラーによれば、「効果を及ぼすものとして実践的に体験された価値世界」(GW2, 156/257) のことである。「ただ私に効果を及ぼすものとして体験されたものだけが環境に属する。したがって《環境》を成すのは、《効果を及ぼす》ものとして私が体験するものだけである」(GW2, 154/252)。

またこの環境世界に属する「環境事物 (Milieudinge)」は、「《自然的世界観 (natürliche Weltanschauung) の方向》のうちに位置しそのうちに見いだされる諸事物」であり、「行為の諸対象としてつねに価値統一体 (Werteinheiten) ないしは物 (Sachen)」である (ibid.)。たとえばわれわれが日常見ている太陽が天文学の太陽ではなく、売られたり買われたりする肉が細胞と組織の総計と化学的・物理的諸過程といったものではないように、自然的世界観において与えられる——純然たる「モノ (Ding)」ではない——「物」とは、「価値を有するものである (しかも本質的に有用 (nützlich) なものである) かぎりにおけるモノ」(GW2, 44/69) として与えられるのである。

ところで自然的世界観の特徴は、シェーラーの見解によれば、「その世界観に従事する主体が、自分のそのつどのまわりの一世界存在 (Umweltsein) ないしはありとあらゆる環境世界存在一般を、世界存在 (Weltsein) とみなすということ」(GW5-a, 87/131) にある。したがって、日常的な自然的世界観においては環境世界がさしあたり世界とみなされる。そして、こうした自然的环境世界の構造は、「自然的な現存在 = 形式 (事物・出来事・自然的空間直観および自然的時間直観) の体系」であり、「それに応じる自然的な知覚形式・

思惟形式・言語形式（常識および通俗言語）の体系」を有している（GW5-a, 88/131-132）。

重要なことは、シェーラーが「この環境世界存在の構造が人間にとってどのように見えるにしても、いずれにせよ、その構造は普遍的生命の特殊種属としての人間の生物学的特殊組織と相関しているということは、この構造に相応する存在には固有のことである」（GW5-a, 88/132）と述べている点である。この意味において、「《効果を及ぼす》ものとして私が体験するもの」といわれる場合の「効果を及ぼすもの」とは、様々な形態をとるにせよ、基本的な部分ではあくまで生命的な身体的有機体にとって効果を及ぼすものである。換言すれば、「ある存在者のそのつどの環境世界は、その存在者の衝動的諸態度とその構造、すなわちその組成に対する正確な対応物である」（GW2, 170/280）。

結論的にいえば、環境世界とは、「世界の内実のうちから、ただ身体という統一体にとって重要な、そしてこの統一体において効果を及ぼすものとして体験された諸内容だけが精選されたもの」（GW2, 158 Anm. 1/260）にほかならない。換言すれば、環境対象がまさに環境対象となるのは、「それら自身が、すでに身体的部分生命の価値諸方向とこの部分生命に内在的な先取諸規則とに基づいて、世界事実の全体から切り離されているかぎりにおいてのみ」（GW2, 170/280）なのである。

環境世界と世界

シェーラーの哲学的人間学では、以上のような自身の「人格—世界」論と「身体—環境世界」論の基本的な関係がそのまま踏襲されたうえで、動物的行動と人間的行動の違いが論じられる（Vgl. GW9-a, 32-36/49-54）。

環境世界とはあくまで身体的有機体あるいは生命的存在者としての人間に相関する「まわり」の世界である。自然的世界観においては環境世界がさしあたり世界とみなされるにせよ、生命的存在者に相関するこの環境世界は——それが世界内容の1つの構成要素であるにせよ——精神的存在者に相関する世界全体ではない。精神的存在者の根本規定とは「有機的なものからの彼の存在的解放であり、《生命》と生命に属するすべてのもの…の桎梏や抑圧や依存から彼が…自由になり、解放されうること」（GW9-a, 32/48）であるがゆえに、精神的存在者は環境世界のうちにとどまるものではない。

シェーラーがいう「世界開在性」とは、こうした環境世界それ自体を精神によって対象化するとともに、それを超越して、より広大な世界そのもの——とくに本質と価値の領域としての世界——へ到達しようとする

人間の精神的作用のあり方にほかならない。はじめにも述べたように、「精神的存在者」である人間は、環境世界に拘束されるものではなく、「環境世界から自由（umweltfrei）」であり、「世界開在的（weltoffen）」存在である。すなわち人間とは、「無制限に《世界開在的に》行動しうるXである。人間生成とは、精神の力によって世界開在性へと高まることである」（GW9-a, 33/51）。

4. ミクロコスモスとマクロコスモス

ミクロコスモスとマクロコスモスと神の理念

ところでシェーラーは『形式主義』のなかで、古い哲学的伝統に従って——ただし当該の著作者の思想に拘束されずに、とことわりをいれつつ——具体的に個性的な世界としての世界を「ミクロコスモス（小宇宙）」と呼び、これに各々の個性的人格を対応させているのに対して、すべての可能的諸対象の統一を「マクロコスモス（大宇宙）」と呼んでいる。

シェーラーによれば、このマクロコスモスに対応するものは、無限にして完全なる精神的人格としての神である。「神の理念は本質連関に基づいて世界の統一性と同一性ととともに与えられている」（GW2, 395/52）。そして神は無限な人格として「諸人格のうちの人格（Person der Personen）」と考えられるがゆえに、有限な個別的な人格はその存在の究極根拠を「神との共同体（Gemeinschaft mit Gott）」の一員としてのみ有することになる。すなわち「個性的諸人格のすべての本質的共同体は、…これら人格の、諸人格中の人格に対する可能的共同体すなわち神との共同体に基づいている。倫理的性格や法的性格を具えたその他の共同体はこの共同体を基礎としてもつ」（GW2, 396/54）のである。したがって、彼によれば、各々の個性的人格もマクロコスモスにおけるミクロコスモスとしてのみ、具体的世界となるのである。

一読してわかるように、ここでのシェーラーの世界に関する立論は、これまでの論述とは違い、著しく宗教的色彩を帯びている。『形式主義』執筆時のシェーラーの哲学の背景にカトリック的世界観があったことからすれば、当然といえば当然のことであるとしても、これによって彼の世界概念が結局のところ宗教的なものに還元されると解釈される余地を残すことになろう。たとえばN・ハルトマンが、シェーラーの人格と世界との相関関係は無限にして完全なる精神人格、すなわち神を導出することに意図があったと解しているように¹⁴⁾、である。

マイクロコスモスとしての人間

シェーラーの思想は、1921年から1923年にかけてキリスト教の思想体系から隔たるようになる。すなわち有神論 (Theismus) から一種の万有内在神論 (Panentheismus) への転換である。この思想上の転換以降の1927年に出版された『形式主義』第3版へのまえがきにおいて彼は、みずからの思想上の転換について率直に言明したあとで、同書の他の箇所の変更はないものの、上掲の箇所についてのみ若干の修正が加えられるべき——これはN・ハルトマンの批評を念頭においているのかもしれない——として、つぎのように述べている。

「倫理学を神の本質と現存とか神の意志とかについてのなんらかのたぐいの前提に基づかせることなどは、著者にはじっさいこの著作においてもけっして一瞬も思い及ばぬことであった。倫理学は著者にはこんにちでも当時と同じく絶対的存在についてのあらゆる形而上学にとってもまた重要であると思われるが、しかし形而上学が倫理学の基礎づけにとってそうだと思われるわけではない」(GW2, 17/28-29)。

シェーラーの当時の宗教的立場からして「けっして一瞬も思い及ばぬことであった」というのは多少割り引いて読むべきだと思われるが、ともかくこのシェーラーの言明は、『形式主義』の当該の箇所で論じられたマイクロコスモス論そのものを放棄するというのではない。ただキリスト教的有神論的世界観からの離脱を述べているにすぎない。哲学的人間学に関する著作を読めばわかることであるが、マイクロコスモス論は捨て去られたのではなく、むしろ中期思想においてはまだ中心概念ではなかったこの理論が後期思想において前面に出てきた¹⁵⁾と解するのが妥当な見方といえよう。

ここはシェーラーの「マイクロコスモス—マクロコスモス」の理論を含む形而上学的人間学全般について詳細に論じる場所ではないのではあるが、彼のマイクロコスモス論が後期思想にも引き継がれていることを確認するために、哲学的人間学における彼のマイクロコスモス概念を簡単に見ておこう。

『形式主義』では、「当該の著作者の思想に拘束されずに」とことわりをいれているように、伝統思想についてはほとんど述べられてはいないが、「知識の諸形態と教養」(1925年)ではこれについて若干ふれられている。そこでは、マイクロコスモスという理念の歴史が、「人間の魂はある意味においてすべてである」というアリストテレスの命題に触発され、この命題の解釈をつうじてトマス・アクィナス、ニコラウス・

クザヌス、ジョルダノ・ブルーノからライブニッツを経てゲーテへと発展してきたとされる。そしてシェーラーの解釈によれば、この理念は、「部分である人間は全体である世界と現存在のうえでは同一ではないが、本質のうえでは同一であり、世界という全体はその一部分なる人間のなかにそっくり含まれている。すべての事物のもろもろの本質は人間のなかで交差し、すべての事物は人間のなかで連帯する」(GW9-c, 90/215)ということの意味するとされる。

こうしたマイクロコスモスの歴史的理念を、シェーラーは彼自身の用語を使ってつぎのように解釈する。

「人間は、身体的存在でもあれば心的存在でも精神的存在でもあるから、われわれの知るあらゆる形式の法則の適用例をなしている。すなわち機械論的法則、物理的法則、化学的法則、生物学的法則、心理学的法則および精神的法則である」(GW9-c, 90 Anm. 1/215)。

シェーラーは、こうしたマイクロコスモスとしての人間の哲学的分析を通じてこそ、マクロコスモスたる神——もちろんこれはカトリックの神ではない——の存在の探求が可能になると考える。最後にこれについての彼の言葉を、最晩年の論文「哲学的世界観」(1928年)から引用しておこう。

「人間はマイクロコスモス、つまり《少宇宙》なのであるし、また物理的、化学的、生命的、精神的という存在のあらゆる本質諸段階は人間の存在の中で互いに出会い交叉するのであるから、大宇宙、つまりマクロコスモスの最高根拠も人間において研究される。そして、この理由からしてまた人間の存在はマイクロコスモスとして神へ接近する第一の通路でもあるのである」(GW9-b, 83/125)。

おわりに

以上において『形式主義』におけるシェーラーの世界概念とこれに関連する諸概念の内容について、人格と世界、身体と環境世界、マイクロコスモスとマクロコスモスを中心にして整理と確認を行なった。もちろん紙幅の関係で詳細な説明は行なえなかったが、ハイデガーに影響を与えたと推測できるシェーラーの世界概念の骨子だけは提示できたと思われる。たとえば彼の人間の環境世界論は、自身が言明するように、ハイデガーの「関心 (Sorge)」論に影響を与えている (Vgl. GW9-d, 198-199/308; GW9-e, 266) ——ただし、「ミ

クロコスモス」論については、ハイデガーはこれをシェーラーの根本的誤謬の1つだとみなしている¹⁶⁾。

シェーラーは『人間の地位』のまえがきで、「人間とは何か、存在のうちに占める人間の地位はどのようなものか、という問いは、私の哲学的意識がはじめて目覚めて以来、他のどのような哲学的問題にもましていっそう本質的・中心的に私がたずさわってきた問題である。…私にとっていっそう幸せなことには、すでに私の論述すみのすべての哲学的問題のうちの大多数のものが、この問題においてますます符合するのがわかったのである」(GW9-a, 9/11)と述べているが、とくに『形式主義』と哲学的人間学の思想的連続性については、小論で論じた彼の世界概念についても当てはまるといえるであろう。

【シェーラーの著作略号】

シェーラーの著作からの引用頁数は、下記のように、全集の巻数(同一の巻に所収の著作は、a, b, …を付して区別する)を略号として用い、全集頁数/邦訳頁数の形(邦訳のない著作は全集頁数のみ)で記載する。訳出するにあたり邦訳書を参照させていただいたが、訳文は一部変えた箇所もある。なお、シェーラーの引用訳文で、原著の《》はそのまま、イタリックは傍点で記載した。

- GW2 *Der Formalismus in der Ethik und die materiale Wertethik*, in: GW2, Bouvier 2000. [岡田・小倉・吉沢訳『倫理学における形式主義と実質的価値倫理学』, 『シェーラー著作集』1-3, 白水社, 1976/80]
- GW5-a Vom Wesen der Philosophie und der moralischen Bedingung des philosophischen Erkenntnis, in: GW5, Francke 1954. [小倉貞秀訳「哲学の本質と哲学的認識の道徳的制約について」, 『シェーラー著作集』6, 白水社, 1977]
- GW5-b Probleme der Religion, in: GW5, Francke 1954. [亀井・柏原・岩谷訳「宗教の諸問題」, 『シェーラー著作集』7, 白水社, 1978]
- GW8 Erkenntnis und Arbeit, in: GW8, 1980 Francke. [弘 睦夫訳「認識と労働」, 『シェーラー著作集』12, 白水社, 1978]
- GW9-a *Die Stellung des Menschen im Kosmos*, in: GW9, Bouvier 1995. [亀井・山本訳『宇宙における人間の地位』, 『シェーラー著作集』

- 13, 白水社, 1977]
- GW9-b *Philosophische Weltanschauung*, in: GW9, Francke 1976. [亀井・安西訳「哲学的世界観」, 『シェーラー著作集』13, 白水社, 1977]
- GW9-c *Die Formen des Wissens und die Bildung*, in: GW9, Bouvier 1995. [亀井・安西訳「知識の諸形態と教養」, 『シェーラー著作集』13, 白水社, 1977]
- GW9-d *Idealismus-Realismus*, in: GW9, Bouvier 1995. [亀井・山本訳「観念論—実在論」, 『シェーラー著作集』13, 白水社, 1977]
- GW9-e *Zusätze aus den nachgelassene Manuskripten*, in: GW9, Bouvier 1995.
- GW10-a *Phänomenologie und Erkenntnistheorie*, in: GW10, Bouvier 2000. [小林靖昌訳「現象学と認識論」, 『シェーラー著作集』15, 白水社, 1978]
- GW10-b *Lehre von den Drei Tatsachen*, in: GW10, Bouvier 2000.
- GW14 Jakob Baron von Uxküll: Bausteine zu einer biologischen Weltanschauung, in: GW14, Bouvier 1993.

【注】

- 1) 木田元『哲学と反哲学』(同時代ライブラリー), 岩波書店, 1996年, 50-53頁を参照されたい。
- 2) M. Heidegger, *Zur Sache des Denkens*, Max Niemeyer 1969, S.88-89.
- 3) シェーラーとハイデガーとの関係について論じた拙論「シェーラーとハイデガー—『存在と時間』をめぐって—」(シェーラー研究会編『シェーラー研究』第1号, 2007年, 59-88頁)では、『形式主義』の、とくにそこにおけるシェーラーの世界概念のハイデガーへの影響についてはたんに指摘するだけにとどめた。小論はこの部分を補完する目的ももつ。なお、文脈がわかるように、はじめの部分に同拙論と重複する内容を書いたことをおことわりしておく。
- 4) これは「物的身体 (Körperleib)」とも呼ばれる。
- 5) これは「心的身体 (Seelenleib)」あるいは「自我身体 (Ichleib)」とも呼ばれる。
- 6) 別の箇所には、「人格—世界, 自我性—外界性, 個性的自我—共同体, 身体—環境」(GW2, 389 Anm. 1/42)という区分がなされている。本文に引用した箇条書きと一部分異なる区分もあるが、これらが相互に還元されないという点は同じである。なお,

- シェーラーの用語が一定していないので、5つの相関関係について述べる際に、他の箇所の記事を参考にして適宜追加や差し替えを行なった部分がある。
- 7) シェーラーが人格概念の解明を集中的に行っているのは、『形式主義』第2部の「形式主義と人格」と題された箇所においてである。これはさらに理論的な観点からの考察(GW2, 370-469/14-166)と道徳的な観点からの考察(GW2, 469-580/166-346)に大別できる。シェーラーの両考察それぞれについて、部分的にすぎないが私はつぎの論文で論じたことがある。拙論「Max Schelerの人格概念」, 広島哲学会編『哲学』第36集, 1984年, 56-68頁。拙論「道徳的人格の本質について—M. シェーラーの人格理論の一断面—」, 『広島大学文学部紀要』第53巻, 1993年, 62-82頁。
- 8) J. Geysler, *Max Schelers Phänomenologie der Religion*, Herder & Co. G.m.b.H. 1924, S.71.
- 9) 奥谷浩一は「しかし、『地位』のなかでは「人格」概念に関する理論的展開は十分にはなされているわけではない。…ここでも、「精神」と「人格」と「自己自身による存在者」などの諸概念のそれぞれの内容と異同の関係は明瞭であるとはいえず、…」(奥谷浩一『哲学的人間学の系譜』, 梓出版社, 2004年, 90頁)と指摘しているが、この指摘には私も賛同する。ここでは、『形式主義』と哲学的人間学との連続性を指摘したいだけである。
- 10) 人格についてと同様に、身体と環境世界についても最小限の基本的な部分の記事にとどめたい。なお、シェーラーの身体概念については、つぎの著作から多くの教示を得た。B. Lorscheid, *Das Leibphänomen. Schelers Wesensontologie des Leiblichen*, Bouvier 1962.
- 11) B. Lorscheid, *ibid.*, S.29.
- 12) シェーラーは人が自己自身をどのような仕方でも経験するか、またどのようなものとして経験するかについて、身体と関連づけてつぎの2つのありかたを区別している。1つは、「集中(Sammlung)」, 「集中された自己内存在」, 「自己のうちに深く生きる」と呼ばれるありかたであり、ここにおいて人は自身の精神的な作用中枢を、自分の核心として、変化する身体的状態の指導者として、それらの変化において恒常的なものとして、体験する。もう1つはそれとは正反対のありかたであり、享楽や気晴らし等に没頭することにおいて自分の核心と自我の座を身体へと移してしまい、その結果精神的な諸作用はことごとく身体の「一時的な外皮あるいは随伴現象」でしかないようなありかたである (Vgl. GW2, 417-418/85-87; GW5-b, 179-180/143-144)。
- 13) ユクスキュルの環境世界論については、ユクスキュル/クリサート著/日高敏隆・羽田節子訳『生物から見た世界』(岩波文庫), 岩波書店, 2005年を参照されたい(ただし、シェーラーは同書を読んでいない)。ユクスキュルの環境世界論について簡潔に知るには、日高敏隆『動物と人間の世界認識』(ちくま学芸文庫), 筑摩書房, 2007年, 33-47頁を参照されたい。ユクスキュルの生物学の思想的影響については、生松敬三『人間への問いと現代』(NHKブックス), 日本放送出版協会, 1975年, 75-94頁を参照されたい。環境をめぐるユクスキュル, シェーラー, ハイデガーの思想については、小林陸『環境と人間』, 加藤尚武編『共生のリテラシー』, 東北大学出版会, 2001年, 51-63頁を参照されたい。
- 14) N. Hartmann, *Ethik*, Walter de Gruyter & Co. 1962, S.236.
- 15) K. Lenk, *Die Mikrokosmos-vorstellung in der Philosophischen Anthropologie Max Schelers*, in: *Zeitschrift für philosophische Forschung* XII, 1959, S.409.
- 16) Vgl. M. Heidegger, *Die Grundbegriffe der Metaphysik* (Freiburger Vorlesung Sommersemester 1928), in: GA29/30, Vittorio Klostermann 1983, S.283. [川原・ミュラー訳『形而上学の根本諸概念』, 『ハイデッガー全集』第29/30巻, 創文社, 1998, 313頁]